

# 北設楽地方における女の仕事着に関する調査 (第1報)

## 戦前を中心として

古川 智恵子 ・ 豊田 幸子

### A Study on the Woman's Work Clothes in the Kitashitara District (Part I)

— Mainly Before World War II —

C. FURUKAWA and S. TOYODA

#### 緒 言

被服は人間の生活の中から生まれ、創られ、存在をつづけ、ある時は外部の刺激を受け、またある時は内部の要求から変容し、あるものは必要性を失って消滅してゆくものである。今回、本学生活科学研究所の機関研究の調査地域である愛知県北設楽地方は地形的に閉ざされた山間地であり、都市文化の影響を直接に受けることが少ない地域であったが、近年、社会経済情勢の変化により農村の生活基盤も消費的となり、今までの生活様式が変容、消滅の危機にさらされ、残存資料の保全どころか、それらについての使用経験をもつ人さえ少なく、聴聞するにも困難になりつつある状態にある。この時にあたり、機関研究の一環として“衣生活の変遷”の中で、当地域の仕事着を調査し、その性能、系譜、さらに変遷等を明らかにすることによって、農民が自らの手で創造した農山村の衣の生活と文化を史的に解明することは意義あることと考え、本調査を行なった。本報では、戦前までの女の上半衣、下半衣について報告する。

#### 方 法

1. 調査期間 昭和55年5月～56年8月
2. 調査地区および調査地点

調査地区および調査地点を図1に示した。

稲武町……武節、御所貝津、富永、小田木の4地点

設楽町……東納庫、田峰、田口、桑平、和市の5地点

東栄町……中設楽、本郷、下栗代の3地点

津具村……行人原、見出、能知、原の4地点

豊根村……川宇連、下黒川の2地点

富山村……下栃の1地点

以上計19地点について調査した。

3. 調査の対象

上記6ヶ町村の役場および郷土資料館をはじめそれぞれの地域の古老を訪問し、女の仕事着に関する事項について詳しく聞きとり調査を行なった。一方仕事着の実物写真撮影を行ない、関係文献等を収集

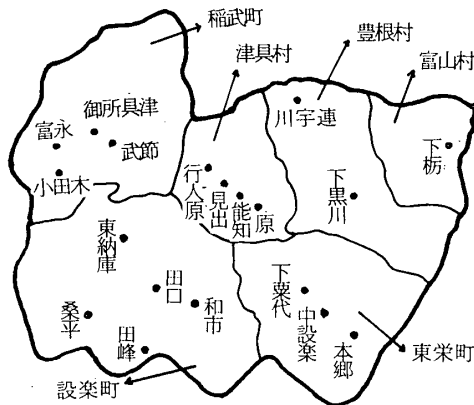


図1 調査地区および調査地点

し、これらを参考に考察した。ここでは明治，大正，昭和16年位までを調査対象の期間とした。

### 結果および考察

表1 町村別山林・耕地面積構成比

単位 ha

項目 町村名	総面積	総面積						耕地面積					
		山林		耕地		その他 (宅地道路等)		水田		畑作		放牧採草地	
		実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
稲武町	9,869	8,513	86	499	5	857	9	178	36	89	18	232	46
設楽町	22,089	20,246	92	1,183	5	660	3	558	47	333	28	292	25
東栄町	12,300	11,193	91	468	4	639	5	149	32	319	68	—	—
津具村	5,347	4,619	86	224	4	504	10	121	54	103	46	—	—
豊根村	12,028	11,320	94	289	2	419	4	103	36	186	64	—	—
富山村	3,471	3,270	94.2	15.1	0.4	185.9	5.4	0.1	1	15	99	—	—

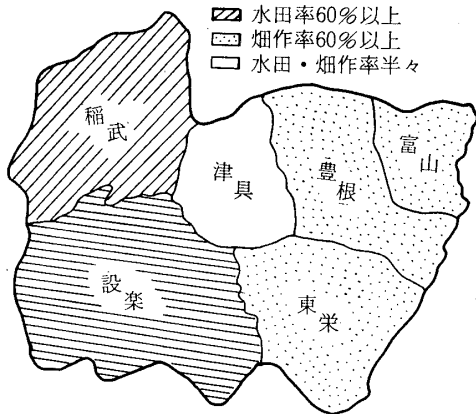


図2 各町村別水田・畑作地割合

#### 1. 地区の概観

##### (1) 町村別，山林，耕地面積構成比

表1は町村別の山林と耕地面積の構成比率である。いずれの地域においても山林が86%以上を占めている山間地域であり，耕地面積は4～5%で，富山村は0.4%のごくわずかの耕地である。

次にこの耕地面積における水田と畑作地のみでの割合を図2に示す。水田率60%以上の地域は稲武町と設楽町で，津具村は水田と畑作率が約半々位である。東栄町，豊根村，富山村は畑作率が水田より多く，共に60%代を占めている。

##### (2) 各町村における経営状況

各町村における経営状況を表2に示す。総世帯

表2 各町村における経営状況

項目 町村名	総世帯数		農家世帯数		総人口		農家人口		一戸当り 平均人数	総耕地 面積	一戸当り 耕地面積
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%			
稲武町	1,041戸	100	553戸	53	3,910人	100	2,316人	59	4.2人	499ha	0.9ha
設楽町	2,197	〃	977	45	7,467	〃	4,030	54	4.1	1,183	1.2
東栄町	1,809	〃	589	33	6,321	〃	2,420	38	4.1	468	0.5
津具村	617	〃	460	75	2,244	〃	1,331	59	2.9	224	0.5
豊根村	560	〃	295	53	2,041	〃	951	47	2.9	289	1.0
富山村	75	〃	36	48	236	〃	134	57	3.7	15.1	0.4

表3 各町村の特産物

町村名	特産物						
稲武町	林産業	稲作	しいたけ	花木			
設楽町	林産業	稲作	トマト	キャベツ	コンニャク	茶	
東栄町	林産業	稲作	大豆	茶	養鶏	養豚	養蚕
津具村	林産業	稲作	しいたけ	トマト	ナス	インゲン	花木
豊根村	林産業	稲作	トマト	インゲン			
富山村	林産業	しいたけ	茶	養蚕			

表4 戦前までの女の仕事着（明治～大正～昭和16年まで）

町村名		稲武町	設楽町	東栄町	津具村	豊根村	富山村
作業衣の種類	水田	じゅばん	長着	長着	じゅばん	長着	じゅばん
	畑作	長半幅帯	はんこ	こぎの半幅帯	長半幅帯	はんこ	長半幅帯
	山林	はんこ	はんてん	はんてん	はんこ	はんてん	はんてん
上半衣	水田	はんてん		袖なし	うわはり		はんてん
	畑作						
	山林						
下半衣	水田	腰巻	腰巻	腰巻	腰巻	腰巻	腰巻
	畑作	腰巻	腰巻	腰巻	腰巻	腰巻	腰巻
	山林	腰巻	腰巻	腰巻	腰巻	腰巻	腰巻
補助衣	たすき	たすき	たすき	たすき	たすき	たすき	たすき
	かぶり	手ぬぐい	手ぬぐい	手ぬぐい	手ぬぐい	手ぬぐい	手ぬぐい
	もの	すげ笠	すげ笠	すげ笠	小がさ	すげ笠	ピーピー笠
	手甲	手甲	手甲	手甲	手甲	手甲	手甲
	脚絆	うでぬき	はばき	(はばき)	はばき	(はばき)	はばき
衣	はきもの	わらぞうり	わらぞうり	わらぞうり	わらぞうり	わらぞうり	わらぞうり
	外被類	こうかけ	地下足袋	わらじ	こうかけ	地下足袋	わらじ
		わらじ	地下足袋	地下足袋	地下足袋	地下足袋	地下足袋
		田植	背中	しろみ	大み	背中	背中
		ござ	あて	の	の	あて	の
		の	き	よろい	の		の
		大	ござ	ござ	肩		ござ
		み			当		い
		の			て		ご
		背			中		
		中			あ		
		み			て		
		の			み		
		ご			の		
		ざ			大		
		の			み		
		の			の		
		背			背		
		中			中		
		み			あ		
		の			て		
		ご			み		
		ざ			の		
		の			大		
		い			み		
		ご			の		
					ご		

数のうち、農家世帯数の割合が少ないのは東栄町の33%、津具は75%と多く、他は半々位である。各町村における特産物を表3に示した。

## 2. 戦前までの女の仕事着

表4は戦前までの女の仕事着について地域別、作業別、服種別に仕事着を類別して一覧にしたものである。6ヶ町村を通じて、その共通性と地域差について述べる。

共通性は、いずれの地域においても長着と腰巻に半幅帯をしめ、頭には手ぬぐいのスタイルである。又地域差のみられるのは下半衣であり、水田の多い稲武、設楽、津具では水田作業時に股引をはき、その他の地域では着用しない。又、股引をはいた地域では畑作、山林作業時にたつげやもんぺの着用がみられ、その他は着用しない。畑作の多い地域では、はばきを使用することがあった。その他、春先とか、秋口には衿はんでん、袖なしを長着の上に着用し、厳寒にはさらに綿入れにして重ね着をした。補助衣については、後程稿を改めて述べることにするのでここでははぶく。

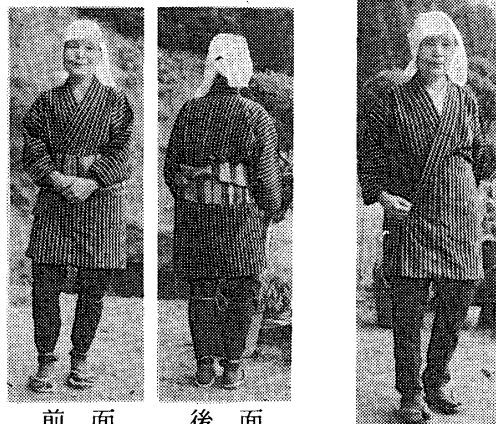
## 3. 仕事着の着衣形態

### (1) 家居の仕事

図3は家居の時の長着の着装写真である。家居の時は長着丈は対丈に決め、はしよりをし、帯をしめる。帯は半幅帯をしめることが多い。家居での仕事の時は、たもと袖の場合、一本のタスキによって晴着や平常着も、すぐ仕事着にかえてしまう機能性をもっている。晴着・平常



前面 後面  
図3 家居の仕事



前面 後面  
図4 水田作業  
身丈の調節のしかた



前面 後面  
図5 畑作業用

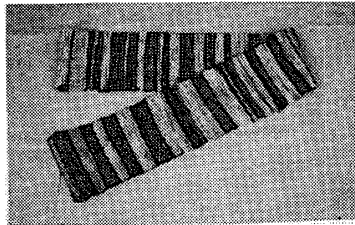
着・仕事着は袖の形態だけが異なるのみで、他は同じ構造に仕立てられている。

### (2) 水田作業

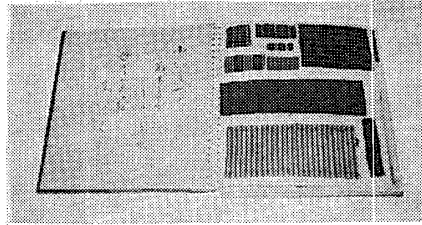
図4は水田作業時の長着と股引の着装写真である。一枚の長着を作業の種類により、袖と着丈を自由に調節して着装し、目的に合わせてしまう機能性と経済性を昔の人は生活の中から生み出していた。水田作業時には、対丈に仕立てた長着の裾をひざ上から帯の位置まで折り上げて、前を打合わせ、帯をしめて着装するのである。長着の下には前項でのべたとおり腰巻だけの場合と、地域によっては股引を着用するところもあった。

(3) 畑 作 業

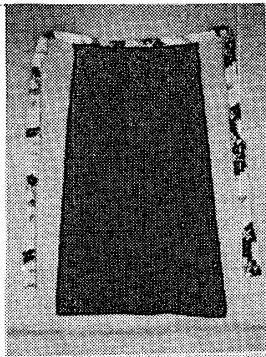
図5は畑作業における着写真で、前面と後面である。畑仕事には水田作業よりも長いひざ下位の着丈にして、腰でおはしりをして帯をむすび、足に、はばきをつけた。前掛は外の仕事にはあまりせず、家での仕事時にすることが多かった。



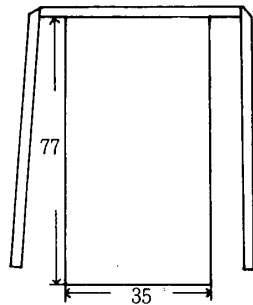
半幅帯



縞帳



前掛



前掛の構成寸法

図6 半幅帯・縞帳・前掛

(4) 半幅帯・縞帳・前掛

図6は裂織の半幅帯、縞張、木綿物の前掛とその構成寸法である。

裂織の半幅帯は、使い古した布を細くさき、よりをかけて帯に織り、普段着として農村婦人が着用したものである。

以前は家族中の着物の生地はすべて婦人が冬の農閑期にこのような縞帳をみて、織ったものである。大変な苦勞のいる作業であるが、家族の者のために心をこめて、楽しみの仕事のひとつとして

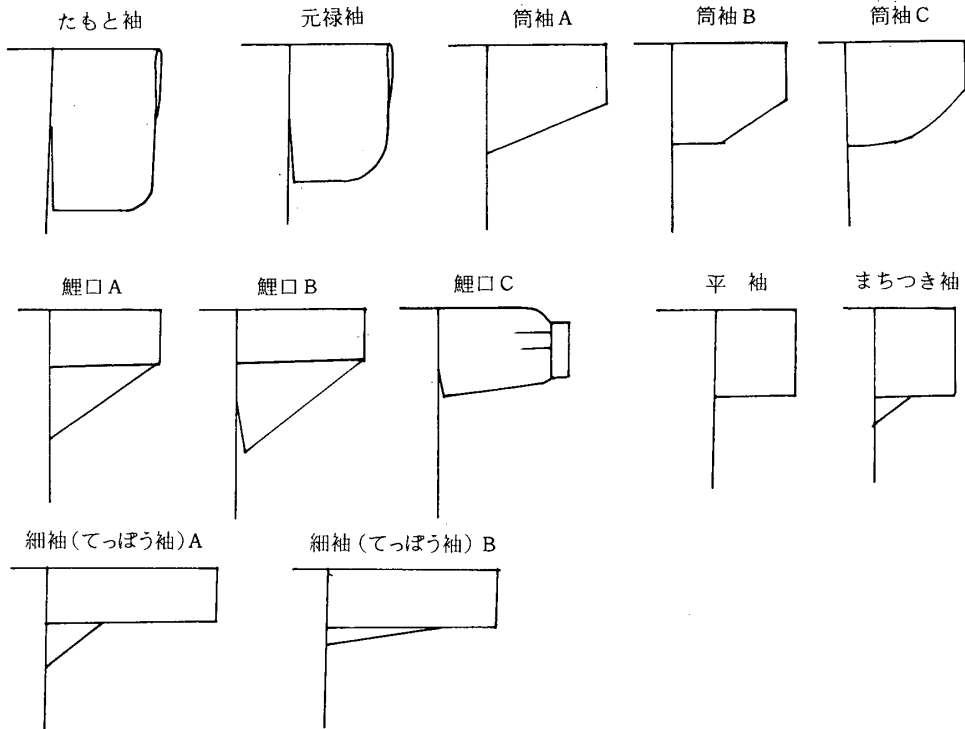


図7 仕事着の袖形態

やっていた。

前掛はひもの部分には写真のような花柄のものや、赤い紐などをつけて楽しんだようである。構成寸法は図のとおりである。

#### 4. 仕事着の袖形態

図7は仕事着の袖形態であり、このように種々の形がみられる。仕事着の名称がその袖の名をもって呼ばれている位、手や腕の動きは動作の機能性につながる要因の第一であると考え。

表5 仕事着の袖形態の分布及び身丈寸法

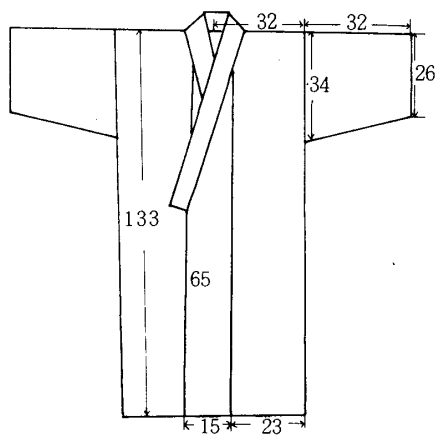
項目 町村名	筒袖			鯉口			細袖 (てっぽう袖)		平袖		たもと袖	元禄袖	仕事着の身丈調査
	A	B	C	A	B	C	A	B	A	B			
稲武町	○	○		○	○	○							130 cm ~ 73 cm
設楽町	○					○						○	57 cm ~ 61 cm
東栄町	○		○ フクラ雀 ナギナタ袖	○ ネジリ袖	○ ネジリ袖	○	○	○	○ ヒロ袖	○	○	○	76 cm ~ 130 cm
津具村	○ ツツポ				○							○	121 cm ~ 125 cm
豊根村		○										○	68 cm ~ 76 cm
富山村	○ ツポウ	○		○ ネジ袖	○ ネジ袖						○	○	129 cm のものを 119 cm に腰揚げする



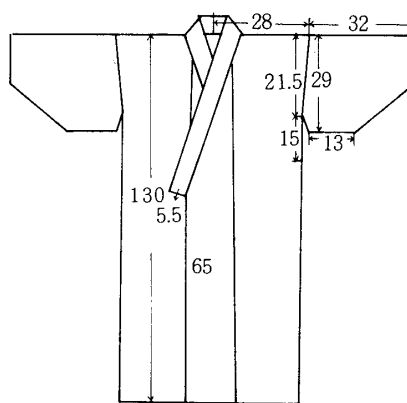
筒袖A 単長着



筒袖B 袷長着



筒袖Aの構成寸法



筒袖Bの構成寸法

図8 筒袖の長着

表5は北設楽地方で使われた仕事着の袖形態の分布及び身丈寸法について示す。

筒袖、鯉口の種類の中で、いずれかは6ヶ町村のどの地域にもみられ、細袖、すなわちてっぽう袖や平袖は東栄町のみみられた。これらの袖は地域によって、筒袖はツツポ、ツポウ、鯉口はネジリ袖ネジ袖などとも呼ばれている。

仕事着の身丈は対丈に仕立て

たが、東栄町、豊根村のように腰切りのものもみられた。

5. 長着の種類と構成寸法

図8は前述の袖形態のうちにみられた筒袖の長着で、筒袖Aは袖口と袖付に8cmの傾斜がつき、振り、身八つ口はない。筒袖Bは筒袖Aに比較して、袖付は13cmも少なく、8cmのやや傾斜した振りがつき、手の上挙が容易になっている。

図9は鯉口の袖の長着で、鯉口Bはねじ袖、ねじり袖とも俗名で呼ばれている仕事着で、袖口から下一枚の布を袖付26cmの半分位まで折り上げて作られており、この構成は非常に経済的であり、17cmの振りが作られている。鯉口Cの長着は俗名コギノと呼ばれ、東栄町、稲武町にみられた長着である。袖口にタックをとり、3cm幅のカフスをつけた形で、鯉の口のような形からこの名がきたものであろう。袖に丸味をもたせて、形態上も女性らしさを出していると思われる。

6. 重ね着の種類と構成寸法

図10は春先の肌寒い時、あるいは厳寒の時に長着の上に着用した衿はんてんの資料とその構成寸法である。身丈は84cmと腰までの丈で、筒袖である。振りがなく、袖付はゆったりとしたものである。衿幅は3cmと細くなり、衿がかさばらないように考えられている。

図11はやはり長着の上にはおられたもので、綿入れの袖なし2種である。(1)は袖なしの前後の身頃とも二布で構成されたもので、襷なしとなっており、布幅が充分なためか、前を打合

せてのボタンがけとなっており、和洋折衷がこの時にみられる。(2)は前後とも一布で出来ており、襷がついていて前がひもがけとなっている。

7. 下半衣

(1) 腰 巻

図12は北設楽地方における腰巻の形態及び構成寸法である。下半衣である腰巻は70cm前後の幅の上にさらしをつけるものとつけないものの2種がみられ、構成寸法は図のとおりである。表6の分布をみ



鯉口B 衿長着  
(俗名：ねじ袖, ねじり袖)



鯉口C 衿長着  
(俗名：コギノ)

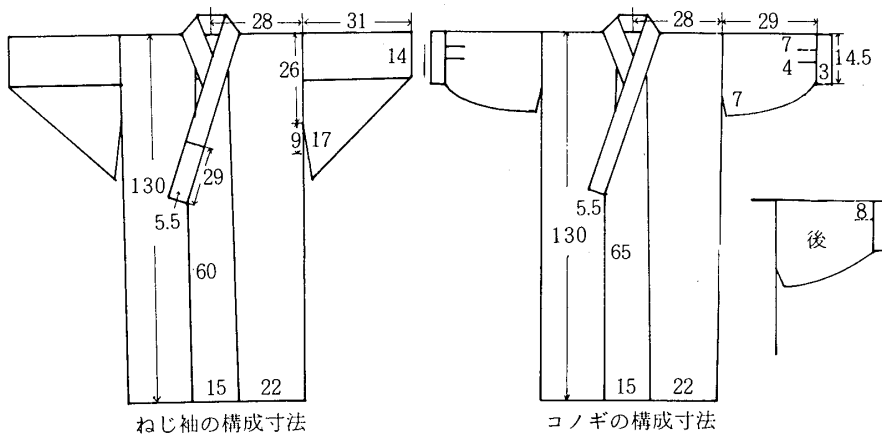
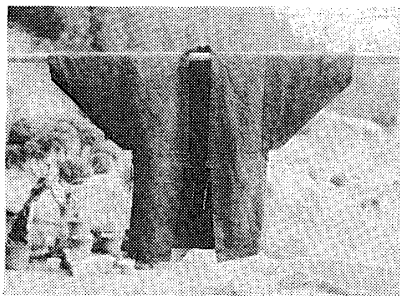
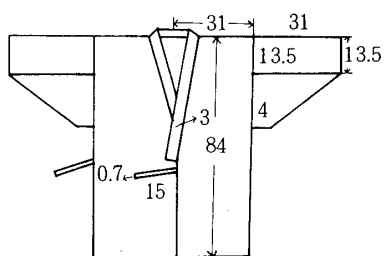


図9 鯉口の長着

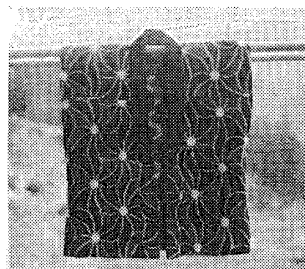


裕はんでん

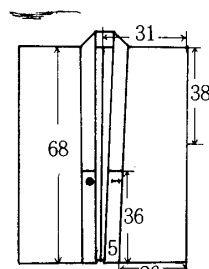


裕はんでんの構成寸法

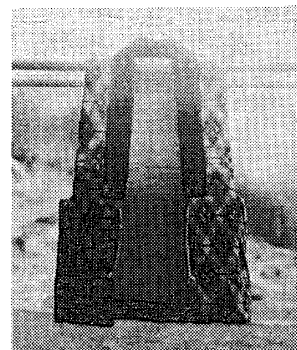
図10 裕はんでん



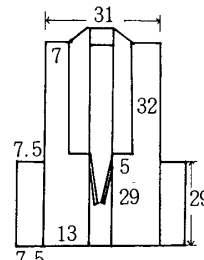
(1)袖なし(襟なし)



(1)の構成寸法



(2)袖なし(襟つき)



(2)の構成寸法

図11 袖なし

ると、6ヶ町村ではほとんどがAの形態で、Bの形態は稲武町、豊根村にみられた。材質は冬はネル、夏はチヂミの木綿が使用され、色は白、紺、赤である。

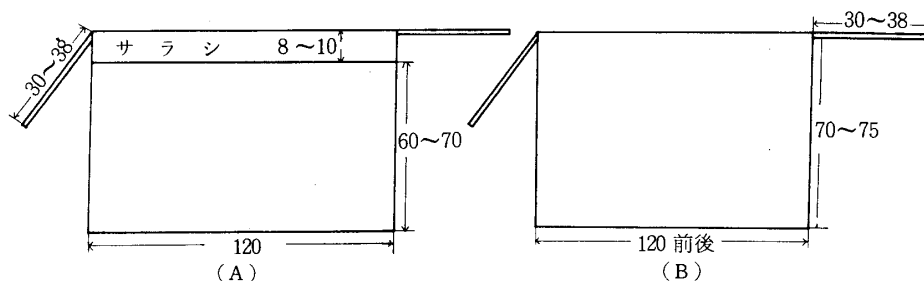


図12 腰巻の構成寸法

(2) 股 引

水田作業には設楽町、津具村において股引が用いられた。股引は主に男子の下半衣として主流をなすものであるから、構成寸法及び裁ち方等は男の

仕事着の項で詳しく報告する。股引は股下が左右に分かれて足にぴったり密着するため、水田内での足さばきがよく、又蛭などからも身を守ることが出来、利用されたものとする。

(3) た っ け

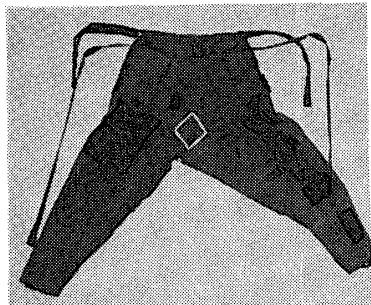
畑作、山林作業時には、たっけが着用された。たっけは色々の種類がみられ、主に男子が着用したものであるから、男の仕事着の項で種類、構成寸法、裁ち方図はくわしく報告する。津

表6 腰巻の地域別形態別分布

形態	町村名	稲武町	設楽町	東栄町	津具村	豊根村	富山村
(A)		○	○	○	○	○	○
(B)		○				○	



具地方ではもんぺの形態に近いものに属すると思われるたっけを長着の上に装着し、山仕事、畑仕事を行なったとのことであった。



前面



側面

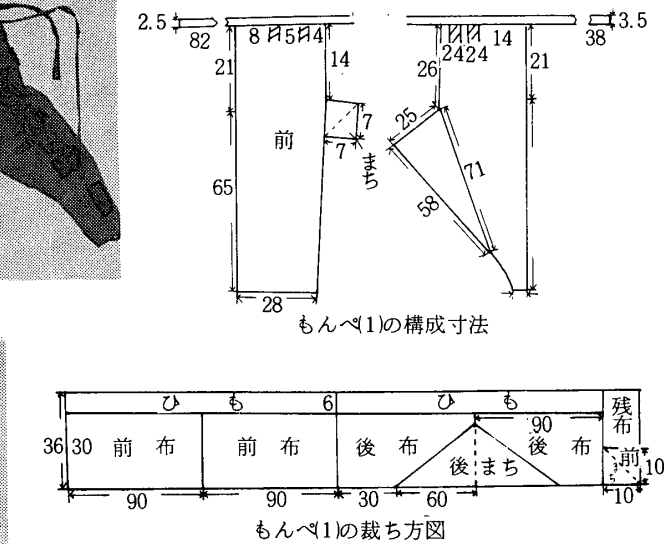


図13-1 もんぺの発達過程(1)

それに比較して、(2)は(1)のあとに作られたもので、裁ち方図に示すように前布は現在のズボン式に近く、後布のみに三角の襠が入っており、股ぐりのみが曲線になっているが、その他は直線裁ちである。側面で見ると、腰まわりでは(1)に比較して(2)はやや細くなってきており、これにウェスト、裾口にゴムを入れた現在のズボン式もんぺにつながってゆくものと考えられる。



前面



側面

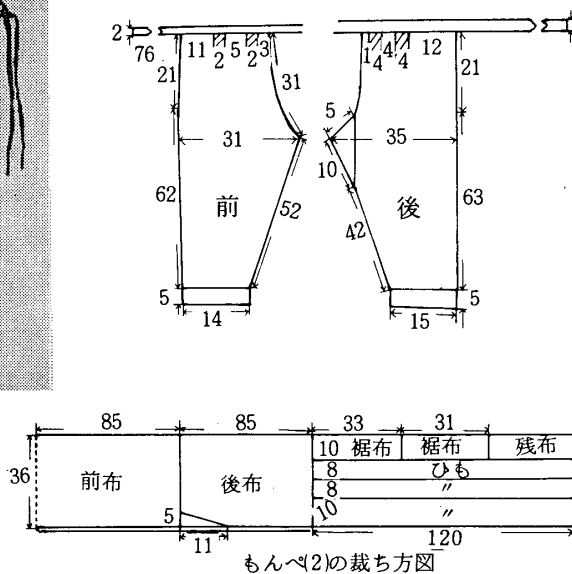


図13-2 もんぺの発達過程(2)

(3) もんぺ  
図13-1, 図13-2は稲武町でみられたもんぺの(1), (2)種の資料とその構成寸法および裁ち方図である。(1)は前面の写真でテープを入れて示したように、方形の襠が入り、後布の裾口が細く、裾口は十分に密着した構成になっている。

これらは第二次大戦中に和服の応急処理に便利なところから、防空着、作業着として大いに普及した。もんぺ(1)、(2)種とも写真のようにつぎがたくさんあたっており、ていねいに補綴されているが、この当時の女の人は自分で布を織り、裁ち縫いをしたものだけに、物に愛着をもって扱ったもので、このようにつぎはぎをあて、大切に着用したことがうかがわれる。

これらのもんぺは設楽町の桑平では、明治35年に天領の山を村が買い上げるために一軒、日一厘の貯金を始めた。そのために女達も出かせぎをした。その仕事は杉、桧の種をまいたり、小さい苗の世話であったが、足を開いたり、腰をまげたりするので、もんぺをはいている人は賃金が高く、はいていない人は安い賃金であった。これは当時、桑平の奥の西川という所で、木地師の奥さん達がろくろをまわすために、もんぺをはいていたのをまねてはき始めたといわれる。このほかに桑平の女の人と一見してわかるところは、三つ衿のところに手ぬぐいをかけ、衿のよごれを防ぎ、洗たくの手間ひま、衣類の寿命を大切にしながら家計を助けたことが、今だに語り伝えられている。

## 要 約

北設楽地方において、戦前までに着用された女の仕事着について調査した結果、農家の一日の生活時間は、生活即労働といっても過言ではない程で、農作業の場と日常生活の場を、明確に分けることは困難であった。したがって、女の人の仕事着はどの地域においても、家居の時や、仕事の種類によって丈を自由に調節し得る和服の長着物に腰巻、半幅帯のワンピース形態で頭には手拭い、仕事によって前かけをつける点に共通性がみられた。これが仕事着の主流であり、又ふだん着の役目をも果していた。

稲武町、設楽町、津具村地域では、上記形態に加え水田作業時には股引を、畑作、山仕事にはたつけやもんぺ等を着用する人もみられた。これらは足さばきや、腰の前屈身などの動作に適應する股下構造に機能的な工夫のみられる下半衣を着用する点に地域差がみられた。

また袖の形態では、筒袖、鯉口はどの地域にもみられたが、てっぽう袖、平袖は東栄町、豊根村以外の地域にはみられなかった。

このように、股引やもんぺにみられる股下のまち構造、および袖の形態がたすき1本にて容易にかえ得ること、袖下のみを縫い直すことによって袖形態を自由にかえ得ることの出来る経済性と簡易性、また着丈の調節のみで作業目的に合わせ、作業動作を機能性のすぐれたものに行っていること等は、農村の人々が何代にもわたって着用し、その生活体験から改善、工夫を加えてきたものだけに尊く、その発想が現代のズボン式もんぺや作業衣の袖形態に連綿と受けつがれているのを見るとき、その当時の人々の生活の知恵に今更ながら感心させられるのである。

今回の調査により、当時の自給経済の中で、綿を作り、糸を紡ぎ、染色し、布を織り、家族の者の着物を一手に引き受けて、裁ち縫いし、さらに農作業という重労働をも担ってきた女達の強さ、勤勉さにあらためて感銘を深めた次第である。

引続き次報では第二次大戦以後、社会経済情勢の動きに伴う北設楽の農村変貌の中での仕事着について調査報告を行なう。